

特別支援教育における授業づくりの新展開（2）

—社会性の支援をめぐる—

企画・司会	赤木和重	神戸大学大学院人間発達環境学研究科
話題提供者	村上公也 #	京都市特別訪問指導員
	古里章子 #	京都市立朱雀第二小学校
指定討論者	麻生 武	奈良女子大学大学院人文科学系
	吉井勘人	筑波大学附属大塚特別支援学校

【企画主旨】

自閉症スペクトラム障害（ASD）児を対象とした特別支援教育において、社会性の支援を重視しない人はいないだろう。障害の中核という理由に加え、彼らが生きづらさを抱えるのは、その社会性に多くの原因があるからである。それゆえ、社会性については多くの支援方法が開発されてきた。しかし、これらの支援方法を俯瞰してみると、いくつかの問題点が浮かびあがる。1つは、社会性の支援といっても、その内実が十分に整理されていない点だ。例えば、社会的スキルに焦点を当てるのか、もしくは、情動に注目するのかによって、支援の内容は大きく異なる。もう1つは、学習活動のなかで、どのように社会性を支援するのかについて検討がなされていない点だ。学校教育においては、社会性だけを取り出して教えることは少ない。だとすれば、学習活動のなかで、どのように社会性を支援するのかについて検討する必要がある。以上の問題意識から、本ラウンドテーブルでは、算数や国語という教科学習を通して、社会性を支援するユニークな授業を行ってきた実践者に、話題提供をお願いした。

指定討論を麻生 武先生・吉井勘人先生にお願いした。麻生先生には、社会性の発達について幅広い研究をされている立場から、社会性を支援することの意味についてコメントをいただく。吉井先生には、特別支援学校で、実際に ASD 児の支援を行われている立場から、社会性の支援のあり方についてコメントいただく予定である。そのうえで、フロアーのみなさんとともに、社会性の支援方法の吟味に加え、「社会性の支援とは何か」といった理論的な問題にまで踏み込んで議論したい。

【話題提供】

■支援しないための支援：つながりの中で（村上公也）

直接的な個別の支援によって技術や能力を効率よく獲得させ、発達を促すということではなく、考えることや想像することのモチベーションを高めるような支援をすることによって、その子なりの知的好奇心や達成感を体験させ、獲得した技術や能力を子どもたちの関わり合いの中で随意的に発揮できる子どもの姿を目指すべきだと考える。学校教育において、その方が本質的で、学習へのモチベーションを考えない個別指導より、むしろ成果も期待できるのではないかと思う。

課題を設定し、トレーニングを繰り返して、問題行動をなくす…それには、どのような支援をすべきかということではない。子どもたちがやってみたいと思える教材・教具を用いた一斉授業によって、直接的な支援を極力減らし、子どもが役割分担や代わり番子を楽しみながら、自ら考えて他の子どもと折り合いを付けながら課題に向かっていく様子を実際の授業のビデオで提示する。

■主体的に、他者とのコミュニケーションを楽しむ子どもの育成（古里章子）

私が、日々の授業の中で、大切にしていることの1つは、“児童が自ら考えること”である。自閉的な傾向のある児童は、想像することや考えることに弱さがあると言われていたが、だからといって、考えなくてもできる授業をすることが、本当に障害特性に応じた教育だと言えるだろうか。

私は、考えることが苦手な子ども達だからこそ、日々の授業の中に“考える”場面を設定し、考えるということはどうすることなのか、考えることによって自分で解決できることがある、ということをお伝えしたいと思っている。自分で考えることができるようになった子ども達は、より主体的に行動し、人と関わり、コミュニケーションを楽しみながら、自分の世界を広げていけるのではないかと。皆さんと共に、実際の授業のDVDを見ながら検証していきたい。

参考文献 [村上公也・赤木和重.(2011). キミヤーズの教材・教具：知的好奇心を引き出す. クリエイツかもがわ